
メルヒェン通りでウサギを飼う

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メルヒエン通りでウサギを飼う

【Nコード】

N9170U

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

私が迷いこんだのはお伽の森であった、と言っても誰も信じてはくれないだろう。もちろん信じて頂くなくても結構、私も信じていないからだ。

まず最初にはつきりと述べておく、私は気が狂っているわけでも脳に難病を抱えているわけでもない。至って正常である。

正常であるがゆえに、私が体験した一連の不可解な出来事は未だに信じる事が出来ない。

だが、ただ一つ言えることは『そんな不可解なことに対する解が必ずしも存在するとは限らない』ということである。

○

久しぶりの休日、日々の疲れを癒すため私は家の近くの山に向かった。

そのままならかな山道を進んでいくこと小一時間。その先には知る人ぞ知る釣りの穴場である小さな湖があるのだ。

私は森の奥の湖面の上に釣り糸を垂らしボーツと赤色のウキを眺めていた。自然の中、ぶかぶかと浮き沈むウキを見ているだけで日頃の喧騒を忘れられる気がする。

私は日常から離れたその束の間の平穏を静かに楽しんでいた。

しかし突然、水面が波立ち、何やらボコボコと不穏な泡が湧き立ち始めた。

何事か、と私が立ち上がった瞬間、湖面から湧き出るようにして白い髭の爺さんが俺の目の前に姿を現わしたのだ。

「きみが落としたのはコレかな、それともコツチかな？」

その爺さんは言う。
私は啞然とした。

湖の中から爺さんが飛び出てきたというのも奇妙な話だが、それ以上に不可解なのは爺さんが両手にプラモデルの箱らしきものを持って、私が落としたのはどちらのプラモデルか？と聞いてくることだろう。

何が起こっているのかさっぱり分からなかったが、私は驚きのあまり声にならない声を上げて持っていた釣竿を湖の中に落としてしまった。あたふたと釣竿を拾おうとするが、あるうことが爺さんは両手に持ったプラモデルの箱をそのままソレをぐりぐりと私の顔に押しつけてくるのではないか。甚だ迷惑極まりない、というかそのプラモの箱は湖水のせいかわチャ又チャに濡れていて気持ちが悪い。

「やめろ、やめてくれ。何なんだ一体！」

頬に当たる不快なぬめり気に耐えられなくなって私はそのままドンツと爺さんを突き飛ばした。

するとボチャンツという水音を立てて爺さんは湖水の中へと身を沈めてしまった。

しまった、と思い私は恐る恐る湖面を覗き込むがそこに爺さんの姿は無い。数分間待ってみたが爺さんが浮かび上がってくることはなかった。

これはまずいことになった。私は顔から血の気が引いていくのを感じつつ、とりあえず警察に、いや救急に連絡しなければと携帯を探す。

だがその時、ドボボボという轟音が聞こえ再び湖面から爺さんが

出てきたではないか。そしてその両手には依然として水に濡れて又チャヌチャになったプラモの箱が握られていた。

「きみが落としたのはこのガンガルのプラモかな、それともこっちのジャア専用サクかな？」

爺さんはまためめめめとした箱を私の顔に擦りつけようとするが、私は爺さんの手首を握ってそれを必死に拒む。

「どつちもパチモンじゃないか！ それに私が落としたのは普通の釣竿だ」

「なるほど、きみは実に正直者だな。きみの正直っぷりに感動したのでこのガンガルとジャアサクは両方ともきみにやろう。さあ、嬉しいだろう」

「いや、だからパチモンはいらないと言っているだろう。売れないプラモの抱き合わせ販売じゃないか！ それに私が落としたのはプラモじゃなくて釣竿だし、そもそも釣竿を落としたのは爺さんがそんなところから出て来たせいだろうが！」

そう、これはまるで悪徳商法ではないか。それも極めて悪質な。

私は叫びながら再び湖に突き落とさんとばかりに爺さんを押すが、爺さんも負けじと私を押し返してくる。

「なるほどなるほど、きみは実に賢明だ。状況に流されず釣竿を無くしたという本質的な問題を明らかにし、あくまでも客観的に釣竿を無くした原因を考察している。しかしだ、きみはそのような理性的な考えに固執するのではなく、もっと柔軟に物事を受け入れるべきではないかな？ そう、例えば……」

爺さんは私の手をさつと振りほどいてびちゃびちゃに濡れたプラモの箱からがさごそと何かを取り出した。

「例えばワシが丹精込めて作り上げたこのガンガルとジャアサクを素直に貰い受けるとかなあ！」

「どこの世界に組み立て済みのパチモンプラモを欲しがる奴がいるんだ！」

接着剤ははみ出て左右の手足が逆になっているようなどこからどう見ても出来の悪いプラモをこれ見よがしに見せてくるが、私はそのまま流れるように一本背負いで爺さんを湖の奥深くへと叩き落とした。

一際大きな水柱が立ったが私はそれを無視して湖に背を向ける。釣竿は惜しいがこれ以上あんな爺さんに関わっている方が危ないだろう。

釣り道具を抱えてそのままその場を立ち去る。

爺さんが湖で溺れてるんじゃないかって？ さっき何ともなく水から出てきたから大丈夫だろう。多分あの爺さんは人間じゃない。何かの主だろう。何の主かは知らないが。

そんなことを考えていると背後から「ちょ、ちょっと待たんか！ きみが帰ってしまうと話が始まらないじゃないか。きみは金の斧銀の斧を知らないのか！」という声が聞こえてきたが私は何も答えずに歩き続ける。

やがて声は小さくなって聞こえなくなった。

○

全く先程は散々な目に会った。

湖に斧を落として女神が出て来た、というのならまだ救いがあるが、出て来たのは爺さんで釣竿を無くした上に変なゴミまで押し付けられそうになったなんて災難以外の何物でもないだろう。折角の休みだというのにろくな事がない。

そして不幸なことに災難というのは続くものである。

私は今、薄暗い森の中を木々を掻き分けながら進んでいる。元々人気の無い山だったが、更に輪をかけて人気の無い獣道に入り込んでしまふとはどういう料簡だろう。自分に問いたい。

どうしてこんなことになってしまったのか甚だ不可解であるが、一つだけ言える確実なことは道に迷った、ということだ。

来た道を真っ直ぐと進めば真っ直ぐ戻れそうなものだと思うが、歩いているうちに見覚えの無い景色に足を踏み入れ、下っていたと思えば上っていて、ようやく見覚えのある道に出れたと思えば行き止まり。そしてようやく道に迷ったと確信がいった。

私は疲れていた。それは肉体的にも精神的にも。

歩けども歩けども道は開けない。まるでここは迷いの森だ。こんなことになるなら来るときに道にパン屑でも撒いておけばよかった。なるほどこれが青い鳥症候群というやつか。ならばこの先にはお菓子の子の家があるはずだな。

……などわけの分からぬ妄念が浮かぶが、それだけ私の精神は疲弊していたのだ。

ああ疲れた、もう一步も歩けない。これ以上進んでも私の精神が崩壊するだけだ。もしこの森から抜け出せずに死んでしまうのならせめて正気のまま天に召されたい。

私はその場に腰を下ろし深々とため息を吐いた。

一体どうなるんだろうか、いや、どうなってしまったんだろうか。憂い顔で天に目を向けるも鬱蒼と茂る木々の枝に視界は遮られる。もはや上にも下にも私の逃げ道は無いのである。

しかし、ちょうどそのとき何かの音を聞いた。

近くの草叢ががさごそと枝葉の擦れ合う音を立て、よくよく耳を澄ませてみると何やら話し声のようなものが聞こえてくる。私は歓喜した。もしやこの迷いの森から出られるのではないか、そんな希望を持って草叢をじつと見つめた。

するとパツと枝葉の間から白い影が出てきた。正直、私は声を忘れてしまった。

というのも草叢から出て来た白い影とは一羽の兎で、その上そいつは小洒落た服を着て時計を見ながら「急がなくちゃ、急がなくちゃ」と言葉を話しているのだから。

先程から常識外れなことばかり起きているが、もしかしたら私は夢を見ているのかもしれない。そうでなければ異セカイに飛ばされてしまったのかもしれないが、それこそ常識外れ極まりないじゃないか。

ああ遂にトチ狂ってしまったようだ。湖の爺さんにしる喋る兎にしる私は見てはならぬものが見えてしまっているのか。

どうしてこうなった？ いや、どうすればいい？ どうしてくれるというのだ！

ああ、もううだうだと考えているのも煩わしい！ とりあえずあ

の珍妙な兎を捕まえて問い詰めてやろう。何せ今の打開策なんてそれくらいしか考え付かない。

私はラガーマンよろしく兎に勢い良くタツクルを浴びせる。うぎやツ、という悲鳴とともに白兎は私の手中に収まった。

「いつたいなあ、何をするんですか!？」

兎は大層ご立腹のようで文句を垂れながら私の手の中で必死に暴れている。この毛皮のもふもふとした柔らかな感触はとても幻覚、妄念の類とは思えない。ならばここは本当に常識外れなセカイなのか？

まあいい、こいつに聞けば何か答えてくれるだろう。

「おい、兎よ。一つお前に聞きたいんだが、ここは一体何処なんだというかお前は どうして喋れるんだ」

「ここ？ 何処って森に決まっていますでしょう。貴方、頭大丈夫ですか。まあ確かに見たところ頭が良さそうには見えませんが……」

気付けば私の両腕には知らないうちに力が入り、兎をキリキリと締め上げた。

「痛いツ いたいツ! や、やめて下さいよ痛いじゃないですか。ああもう、急がないといけないのに、もう時間が無いのに、どうして僕の邪魔をするんですか!？」

「急いでるって言われても、お前は何を急いでいるんだ? あれか、不思議の国のアリスにでも会いに行くのか」

兎を掴む手を少し緩めると、私の口からついそんな世迷い事がこ

ぼれ出てしまう。だってこいつの格好はどうみてもあのメルヘンな童話に出てくる白い兔にそっくりだからだ。

急がなくちゃ、なんて言っていたしこいつは本当にあの童話の兔なのかもしれない。

「そんなの見れば分かるでしょう。私は貴方なんかには捕まえてらるべきじゃあなく、アリス嬢に追い掛けられるのが仕事なんですから。私が遅れたら話が始まらないじゃないですか!」

「まあ、落ち着け。この森から出る方法を教えてくれたらお望み通り離してやるよ」

このまま問答を続けても埒が開かないので私は兔に条件を出した。逃がしてやる代わりに道を教えろと言うわけだ。

兔を握る手に力が入れ始める私の態度は道を尋ねるそれとは到底かけ離れているが、兔も早く仕事に行きたいのだから素直に快諾してくれた。

「ああ、それならこつちですよ。いや、そつちじゃなくてあつちですよ! ああもう、全く頭の悪い人だなあ……痛いイタイツ! ごめんなさい、つねらないで」

私は兔を携えて森の中を進み始めた。もちろん時折、口汚い兔の脇腹を軽くつねる必要があったのだが、その詳細は書かない。ただ一つ言えることはこの兔が想像以上に性格が悪いということである。

兎を抱えて道案内をさせる、それはさながらカーナビのようである。

ウサナビと名付けよう。可愛いし、もふもふと柔らかいから売り出せばきつと大ヒットするに違いない。ただ、口が悪いのこの森のナビゲートしかできないのが欠点だが。

そうこうしているうちに（数々の兎の暴言を聞き、その度に何度か脇腹をキュツとつねったのだが）開けた道に出ることが出来た。思ったよりもトントン拍子に事が進んで逆に怖い。もしかしてこれは夢ではないだろうか。

夢だしたらありがたい。ただし目を覚ますのは鬱蒼とした森じやなく、自分の部屋のベッドの上が理想である。

「ぶつぶつ言っていないで道案内をして上げたんだからさっさと僕を解放して下さいよ、まったく。僕は忙しいんだから」

兎の声に我に帰る。手元の白いのがぎろりと私を睨んでおり、その鋭い前歯で私の指に噛みつかんとする勢いだったので私は慌てて兎を地面に落とした。ボスンと音を立てて兎は着地する。

「乱暴だなあ、もっと丁寧に扱って下さいよ！ 僕を誰だと思ってるんですか」

「はん？ 兎だろ、不思議の国の」

そう言うと兎は侮蔑を含んだ目で私を見てきた。おそらく「この馬鹿は何にもわかつちやいない」などと思っているのだろう。しかし、兎の方はこちらを見上げる位置にいるのに私を見下すとは何とも変な話だ。

「いいですか。僕はね、エリートなんですよ。不思議の国以外にも

主役級の仕事がたくさんあるのですよ」

「はあ、主役級の仕事お？」

何だそれは。お前は常に時計を見ながら走って、「急いでますアピール」をしているだけの小狡い小動物ではなかったのか。

「僕がこうやって不思議の国の可愛いマスコットをやってるのは僕という存在の一面に過ぎないのですよ。あるときは亀公と互いのプライドを賭けた勝負を繰り広げる伝説のレーサー。またあるときは悪辣最低な狸の奴を知謀知略でもって成敗する天才策士」

「そしてまたあるときは鮫に生皮を剥がされる嘔吐き兔、ってか？」

私が口を挟むと兎の白い顔をみるみるうちに青くなっていった。

「嫌なことを思い出させないで下さいよ！ ああもう、思い出しただけであの時の傷が痛みだしてきた。あの鋭い歯が僕の肌に触れてそのまま……そして誰かがやってきて……そう傷に海水を、海水をぶちまけたんだ！ 痛い痛いイタイイアアアアアアア！」

突然兎は発狂したように叫び出しガタガタと振るえ始めた。どうやらこいつのトラウマを呼び起こしてしまったようだ。可哀相なことをした。

「おい、目を覚ませ！」

「つぎい！ ハッ、僕は一体何を……」

このままでは埒が開かないので叫ぶ兎の頬を二、三度叩いて正気

を取り戻させた。

しかしこれで大体この世界がどのようなものかが分かった気がする。

つまりここはお伽話の登場人物たちの楽屋のようなものなのだろう。「不思議の国のアリス」の兎も「兎と亀」の兎も「かちかち山の兎も、そして「因幡の白兎」も実は全部同じ兎で、この世界を起点として各々の物語へと出勤しているようだ。何ともメルヒエンな世界ではないか。

しかしこの世界の実態はよく分からない、というかそんな馬鹿げた話があるか！……と言いたいところだが実際に言葉を話す兎や何度沈めても甦ってくる湖の主を見れば、少なくともこの世界が私の居た世界とは違うセカイだということは認めなければならぬだろう。

どうすれば元居た世界に帰れるのだろうか。いや、そもそも私はこのセカイから抜け出すことが出来るのだろうか。甚だ疑問である。

「おい、兎よ。お前、この世界から何とかして抜け出す方法を知らないか？ 俺は元居た世界に帰りたいんだ」

「元居た世界？ 貴方、一体何処から来たんですか」

「俺はだな、ええと。このお前たちの世界とは別の世界から来たんだよ。あ、あれだ。パラレルワールドだとか次元跳躍だとかそんな感じなんだよ、たぶん」

「何を言いたいのかまったく分かりませんね。やっぱり、貴方頭が相当弱いんじゃないや……いや失礼、何でもありません。もっと具体的に、何処の国の何処から来たのかを教えてくださいませんか」

さつきまでは過去の幻影にガタガタと煩く身を振るわせていたというのに、この兎はお得意の口の悪さまでも回復していやがる。話し方といい態度といい本当に腹立たしい奴だが問題解決の糸口がこいつしかない今、素直にこの腐れ兎の言うことを聞いておくべきだろう。

どうせこの世界の住民である兎には日本だの県だの言っても分からないだろうが、私は兎の言に従い自分の住所を国名からアパートの部屋番号まできっちり伝えた。

「ああ、そこならこの山を降りたらバス停がありますから、そこで

×町行きのバスに乗れば大丈夫ですよ」

思ったよりも問題は早く平易に解決した。

「え？ いや、バス停？ 何で普通にバス停なんかがあんの？ ここはメルヒェンの国じゃなかったのか」

「何寝呆けたことを言ってるんですか、ここは日本ですよ、二、ホ、ン。それにいくらここが寂れた田舎だからってバスくらいは通ってますよ」

「いやいやいや、日本にはいないからな。喋る兎とか湖の主の爺さんとかいないからな。というかそんなの現実にいるわけないからな、な！」

「そりゃ現実には僕みたいな兎はいないでしょうね。だって僕は物語の住民ですから」

「いや、だから何でここは現実世界と物語の世界がごっちゃになってんだ？ 境界が曖昧なのか、時空の歪みが生じてるのか？」

「そんなこと僕に聞かれても知りませんよ。僕だって全てを知ってるわけじゃないですからね。僕はラブプラスの悪魔じゃないんですから」

「それを言うならラブプラスの悪魔だ。どうして数学界の偉人が美少女恋愛ゲームになるんだ。それより本当にこの山を降りれば俺は家に帰れるんだな」

「ええ、こっちの道を通つ直ぐ行ったら下山出来ますよ」

実に世界は混沌としている。もう私も何が正しくて何が間違っているのか分からなくなってしまった。

異世界に迷い込んだと思ったら実は迷い込んでなかった、などと何を言っているか分からない言葉が浮かぶがまさにその通りである。一体常識は何処に逃げてしまったのか。

まあ、もうどうでもいい。考えるだけ無駄な気がしてきたのでもう家に帰ろう。そして風呂に入って床に就こう。よし、そうしよう。

「兎よ、世話になったな。じゃあ俺は帰るわ。お前も仕事頑張れよ、じゃあな」

俺は兎に別れを告げ、兎に教えてもらった下山コースへと足を進めた、と思っただけ何か知らないが兎に全力で止められた。

「ちょっと待って下さい！ やっぱりそっち行ったらダメです、死んじゃいますよ！」

「いや、お前さっきこっちに行けば山を降りれますよ、って言うてただろ。何だよ嘘だったのか、また鮫に皮剥がれるぞ」

「その話はもうしないで下さい！ ああ、また古傷が……」

兎は再びトラウマに悶え出すがささと帰りたいたのでひっぱたいて正気に戻す。

「うう、もっと優しくはたいて下さいよ」

「調子に乗って尻を叩き過ぎたのは謝るが、どうして下山したら駄目なんだよ」

「いえ、下山するのは別にいいんですけどね。というかささと私の目の前から消えて欲しいくらい……冗談ですごめんなさい。いやね、今の時間帯はそっちの道、出るんですよ」

「出るって何が？ 幽霊か？」

兎がおどろおどろしい声で言うので、もしや何処その落武者の怨霊が耳でも取りに出てくるのかと思ったが、生憎今は太陽も空高くに鎮座ましましている。普通真っ昼間に出る幽霊など誰も怖がらないだろう。

むしろ言葉を話す兎やインチキプラモを渡そうとする湖の主の方がよっぽど怖い。

「幽霊じゃなくて、しきりに相撲を挑んでくる前掛け一丁の男の子

「がでるんですよ、この時間帯は」

「それは金た……いや、もういいや。どうせ金太郎なんだろ。でも相手は何だかんだ言っても人の子だし話せば分かってくれるんじゃないのか」

流石に金太郎とは言え人の子。湖の爺さんのように話が通じないわけではないだろう。それに相手は子供だ、それほど恐れることも無い。

「いや、それがですね、もう人とか動物とか関係無しでやたらめったら勝負挑んでくるんですよ。こつちの話なんか聞いてくれやしなしいし、この前なんか熊と相撲して勝ったなんて言っていましたからね」

「それはもうやっぱり化物だな。あ、そうだ、わざと負ければさっさと帰れるじゃないか」

私のそんな名案に兎は渋い表情を見せ、何やら私に身を寄せてきて小さな声で話し始めた。

「あまり大きな声じゃ言えませんがね、ココだけの話ですよ。金太郎さんって大きな斧持ってるじゃないですか、ほら鉞まさかりって言うんですか。彼ね、とつてもプライドが高くて相手がわざと負けようなんてしたら相手の脳天をあの斧で……」

「怖ろしすぎだろ、金太郎。そんなスプラッターな狂人を野放しにしていいのかよ」

「彼には誰にも勝てないからどうしようも無いんですよ。だから極力彼には関わらない方がいいんです。触らぬ金太郎に祟り無しって

「言っじゃないですか」

兎は両手を合わせてなむなむと念仏を唱えるふりをする。そんな怖ろしい子供がそこらにウロウロしているというのなら尚更私はこの山から逃げ出したい。

「だったらどうやってこの山を降りろって言うんだ。俺を早く家に帰してくれよ」

「そうですね、あつちの道は金太郎さんが血を求めて彷徨っているからこつちの道に行つて下さい。ちよつと時間は掛りますが、真っ直ぐ進めば国道沿いの海に出れますよ」

金太郎、国道という言葉が同時に出てくるのにはかなり違和感を覚えるが、山から抜け出せるのならこの際どうでもいい。国道に出れば徒歩でもヒッチハイクでもして家路に着けばいい。

「なあ、海には金太郎みたいな危ない奴はいないだろうな。浜辺にいた人魚姫の歌声を聞いて発狂死してしまいました、なんて洒落じやすまねえぞ」

「貴方、変な方向に想像力が豊かですね。大丈夫ですよ、あの海にはそんな危険なのはいませんから。せいぜい海亀が一頭いるくらいですよ」

「その亀の傍を通つただけで心優しい漁師にボコボコに殴られたりなんかしないだろうな。俺は無事に帰れるんだろうな」

「しつこいですねえ、貴方に嘘なんか吐いたって僕に何の得があるんですか。もう僕だつて時間が無いんですからさっさと帰っちゃっ

て下さいよ!」

そう言つて兎は俺を突き飛ばして素早く草叢の中に逃げ込んだ。何て忙しない奴なんだと俺は呆れたが、ふと足元に落ちていた懐中時計に気が付いた。

おそらくあの兎が落ちていったものだろう。俺は草叢に向かつてそれを力の限りぶん投げる。すると草叢から「うぎゃあ!」という甲高い声が聞こえてきたのでちゃんと落とし物は持ち主の物に届いたらしい。

良いことをすると気分がいいな、と鼻歌混じりに私は海へと足を進めた。

非現実と思つていた世界が実は現実であつたという実に不可解な出来事を体験し、私は非常識さに頭を悩ませた。

つまり今日起つた出来事は常識には到底理解できないことなのだろう、だから結論や解答を導くことなど私には出来ないのである。

……と言つ具合に話を無理矢理まとめながら私は緩やかな山の斜面を下つていた。時折流れて来る潮風を受け、今日の夕食は何にしよつと思いを馳せる。

私の身に起つた実に不可解な出来事は異常……いや、以上である。誰も信じてくれはしないだろうと思うが、私ですら信じられないのだ。信じる、という方がおられたらその理由を4000字のレポートにまとめて提出して頂きたい。

あ、そうだった。実はこの後、海亀に絡まれ江の島に連れて行かれそうになり、そこをたまたま通り掛かった桃太郎キャラバンにスカウトされそうになつたのだが、これはまた別の話である。

事の詳細は追って書くかもしれないし書かないかもしれない。とにかく今は休ませてくれ、ついさっき鬼が島から帰って来たばかりだから非常に疲れているのだ。

では、これにてこの体験記を締めることとする。

○

追伸

後日、『湖の主』と名乗る人物から宅急便が届けられた。中を開けてみるとあのとき湖に落とした釣竿と出来の悪いパチモノプラモデルが詰め込まれていた。

私はそれを窓から放り投げて、湖の主をぶん殴りに駆け出した。

(後書き)

勢いだけでやった、反省と後悔しかしてない。

すべては暑さのせいです。

長い、鬱だ、爆発したい。

久々に悪い意味で私らしいものを書いた気がします。今すぐゴミ箱に捨ててしまいたいくらいです。

ダメ、ゼツタイ！ 動物虐待。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170u/>

メルヒェン通りでウサギを飼う

2011年10月5日20時27分発行